

タイトル

『H₂O — ひとしずくの記憶と祈り』

“H₂O: A Drop’s Memory and Prayer”

著者名

神薙 悠 (かんなぎ ゆう)

あらすじ

水のしずく H₂O は、汚染に覆われた空と大地を旅しながらも、自然の癒しで何度も浄化される。繰り返される破壊と再生の狭間で、人間の責任と未来の選択を問いかける物語。

特記事項 (概要、アピールポイント等)

本作品は、一滴の水「H₂O」の視点から現代の環境問題を描く物語です。自然の循環と人間活動の影響を繊細に映し出し、破壊と再生を繰り返す地球の姿を通じて、一人ひとりの責任と未来への選択を問いかけます。この星の未来は、私たちの手に委ねられているのです。

本編文字数 1,450 文字

【本編】

僕の名前は、H₂O。

この星に数えきれないほど存在する、たったひと粒の水のしずく。

けれど、僕は知っている。

たとえ一滴でも、命を繋ぐ大切な鼓動であることを。

今日もまた、海から空へと旅立った。

太陽の温もりが、僕をふわりと包み込み、身体が光に溶けていく。

蒸気となり、風になり、空へ、空へ。

世界は青く、美しく、無垢だった。

風は歌い、雲は踊り、僕はその一部になって自由に舞った。

……けれど、その空は、静かに泣いていた。

見上げた先には、灰色の膜のようなものが、じわじわと広がっていた。
焦げた匂いが鼻を刺し、遠くの街から昇る煙が、黒い指先のように僕を掴んで離さない。

——痛い。

胸の奥がきしむ。透明だった僕が、じわじわと濁っていく。
それは、魂が少しずつ曇っていく感覚だった。

雲の中にいた仲間たちも、言葉を失っていた。
沈黙が、悲しみよりも重くのしかかる。

「……苦しいね」

誰かのかすかな声が、雲の奥に溶けて消えた。

やがて、僕は雨となって地上へと降る。
降りた先は、機械の音が響き渡る、煙と鉄の街。
真っ黒な粒子が僕に纏わりつき、ぬめる感触が全身を蝕む。

ああ、僕はもう、あの美しい透明じゃない。

汚れた僕。
多くの仲間たちも、その美しい姿を失い、暗く淀んだ水たまりへと流れ込んだ。
暗闇のトンネルのような川を下り、やがて巨大な蒼い海に辿り着く。

だけど——物語は終わらなかった。

海の底。静寂と冷たさのなかで、僕は土に抱かれた。
微生物たちが、まるで母のように僕を包み、ゆっくりと穢れをほどいてくれた。

「おかえり」

言葉はなかったけれど、確かにそう聞こえた。
少しずつ、僕の身体は光を取り戻していく。

自然は、まだ僕たちを見捨ててはいなかった。

……けれど、心の奥には拭えない不安があった。
この浄化の奇跡は、あとどれだけ繰り返せるのだろう。
人間の欲望が止まらなければ、もう『戻れる未来』すら失われてしまう。

「僕はただの一滴。けれど、その一滴、一滴が全て消えて無くなれば、
蒼く輝くこの星も、静かに終わりを迎えてしまうよ……」

そして僕は、再び空へ。

今度は、台風の渦に巻き込まれながら。

激しい風が僕の身体を引き裂き、闇の渦へと押し込む。
どこに運ばれたのだろうか？
燃えたゴミの焦げる匂い、刺すような排気ガス、
そして無数のプラスチックの欠片が身体を締め付ける。
それらが僕を塗りつぶし、光を奪っていく。

「もう、元の輝きには戻れないのかもしれない……」

真っ暗な絶望の底で、僕は声すら出せなくなった。沈んで、沈んで、そして――

雨になって、森へと落ちた。

絶望の淵で彷徨う僕は、深い森の土の中へと染み込んでいく。
言葉を持たない命たちが、静かに、しかし力強く僕を包み込んだ。
温かな土のぬくもりに触れ、僕は再び透明な姿を取り戻してゆく。

けれど、このまま世界が淀んでしまったら、
この広大な楽園も、いつか失われてしまうだろう。

だから、僕は、伝えたい。
この小さな声が、風に乗って、遠くの誰かの胸に届くように。

「どうか、気づいて。
僕たちの命の源――この星を守ってほしい」

人間たちは、少しずつ変わろうとしている。
森を育て、川を清め、空をきれいにしようと、
未来のために活動し始めている。
そのひとつひとつは、小さな点かもしれない。
でも、それはいつか、線となり、命の輪となり、希望の環となっていく。

あたらしい命を育むために。

——僕は、今日も旅を続ける。
空へ、森へ、川へ、大地へ。

君がふと見上げた空に。
君がすくった水の中に。
僕はきっと、そこにいるよ。

一滴の水として。
小さな命として。

この星が、永遠に澄みわたるように。

了